

## 茜色の歌姫



## 第三部 有馬皇子の変



飛鳥時代の武人

そがのあかえのおみ  
蘇我赤兄臣、有馬皇子に語りて曰く、「天皇の治らす政事、三つの失あり。大きに倉庫を起  
てて、おほみだからのたから財を積みあつむ聚ること、一つ。長く渠水みぞを穿りて、ひとのくひもの公糧を費やすこと。二  
つ。舟に石を載つみて運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有馬皇子、(中略)欣然よろこびて曰は  
く、「吾が年初めて兵いくさを用ゐるべき時なり」

(中略)是の夜半に、赤兄、物部朴井連、鮪を遣はして、(中略)有馬皇子を市経の家に囲む。  
(中略)皇太子、親ら有馬皇子に問ひて、曰はく、「何の故か謀叛けむとする」とのたまふ。  
答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」

『日本書紀』卷第二十六

春過ぎて夏来るらし 白妙の衣干したり 天の香具山

『万葉集』卷第一

### 第三章 二上山 658

かつて豊日大王が高御座にあつた折、有馬皇子には、難波に広大な宮が与えられていた。  
その父なる豊日大王が崩御して後は、もっぱら二上の山の麓なる仮宮で過ごすことが多い。  
二上山は、飛鳥より北西へ三十里(約16キロ)、高さは一里ほどの頂が二つ、瘤のように並んでいる。その麓にある有馬皇子の仮宮の門前に大海人皇子が立ったのは、額田郎女と逢つた翌々日の夜であつた。

すでに、有馬皇子には、守大石、物部鮪らをして、額田郎女が宝大王に供される食に毒を混ぜ、少しづつその四肢を蝕み、年のうちに死に至らしめるとの謀を諾したと伝えてあつた。その意を直に確かめるため、有馬皇子は大海人皇子を二上の仮宮に招いたのである。門をくぐると、随行してきた舎人の海部大石、村国男依は、門に近い苦屋に留められた。大海人皇子は独り、氣遣わしげな二人の眼差しを背に、暗い庭を歩いて、宮の階梯を登つた。

宮の奥まった室に案内され、扉が開かれたとたん、けたたましい嬌声と、快を含んだ男どもの呻きと、鼻をつく匂いが飛び出してきた。

室の裡にあつたのは、十数余の全裸の男女であつた。戯れあい、まぐわいあい、瓶に口をつけて酒を飲み、いずれも有馬皇子と同じ年配か、痴態の限りを尽くしている。

「よくぞ、参られた」

蠢く剥き出しの肉の塊に囲まれ、室の中央に座していた有馬皇子が、右手を大きくあげて叫んだ。鬢を解いて黒髪を肩に垂らし、その股間に一人の女が、白い尻を向けて貌を埋めている。皇子の到来にも、室を埋める男女はいずれも眼すら向けず、ひたすらに快をむさぼり続けた。

「皇子も衣を脱ぎたまえ。ともに愉しもうぞ」

女に陽物を吸わせ、陶然たる面持ちで、有馬皇子が手招きした。

大海人皇子は、立ち尽くしたまま、眼を走らせた。男どもには知った貌もあった。大和の豪族の子弟らしい。女どもの貌は知らぬが、その髪や首、裸身の胸や腕を彩る装身具を見るに、民の出ではなさそうであった。

有馬皇子は、そのひととなりや、慧いが陽狂であると言われていた。戯れがすぎる、との声も高かったが、そのぶん、若い豪族の子弟に人望があるとの風評も耳にしていた。

あるいは……、この仮宮に集っている者どもは、有馬皇子の謀に加担しているのか？

「疾う」

有馬皇子に促され、大海人皇子は意を決し、着ていた衣を脱いだ。手招かれるまま、有馬皇子に並んで座った。

「嗜（たしな）まれるか？」

差し出されたのは、青銅の香炉であった。細長い柄の先に、小さな筒形の皿がついている。皿には、細かく砕いた干し薬のようなものが、ひとつまみ載せられ、半ば灰になり、一筋の煙が立

ち昇っていた。

芥子か……。

四肢の感覚を鈍らせる効用があり、医術に用いられることが多い。これを干し砕いて粉とし、

火を点じてその煙を吸えば、気宇は壮大になり、極楽郷に漂う心地がすると聞いていた。ただし、ために軀を害し、廃れ人となる者も少なくないらしい。

なるほど。大海人皇子は、ひたすら快にのたうつ男女の、うつろな眼を見て思った。皆、芥子の煙に酔っている。

「嗜まれぬか」

有馬皇子は、強張った面持ちの大海人皇子を見やって苦笑いし、不意に、己が陽物を吸っていた女の髪を掴み、貌を上げさせた。

年は、有馬皇子より二つ三つ、上か。鼻梁のすつきりとした美まし女であったが、細長い眉の下の眼が、どこか儂げな色を醸し出している。

「されば、この唇と舌を、嗜みたまえ」

有馬皇子の目配せに、女はかすかに頷き、大海人皇子に覆いかぶさった。右手で皇子の股間をまさぐり弄びつ



二上山（奈良県葛城市）

つ、額から耳へ、耳から唇へ、顎へ、喉へ、胸へ、腹へと舌を這わせ、やがて陽物を唇に含んだ。巧みな舌使いに敏感な箇所を廻られ、皇子の軀はたちまち快に満ち、思わず眼を閉じ、息を荒げた。

「巧みである」

傍らの有馬皇子の、笑いを含んだ囁きに、大海人皇子はかつて、伊勢の海辺の苦屋で、海部の一族の小盾とともに、漁人の妻を姦したことを思い出した。あの折も、小盾は、女の唇に皇子の陽物を吸わせ、言った。巧みである……と。

薄く眼を開け、傍らを見やった。有馬皇子は立ち上がり、女の背後に回った。傲岸な笑みを浮かべつつ、膝を突き、猛々しく屹立する陽物を、女の陰に差し入れた。

女は、大海人皇子の股間を口から離し、のけぞった。苦しげに喘ぎつつ、それでも手で陽物の付け根を握り締め、さらに、貌を下げて唇を寄せてくる。口と陰とを姦され、女は喉の奥で歓喜の呻きを発していた。

「大海人皇子よ。額田郎女のこと、確かに承った」

女の胸を両手で抑えて腰を動かしつつ、有馬皇子は言った。

「事が成った秋には、左大臣の位を賜ろうぞ」

大海人皇子は微笑んで見せた。有馬皇子は満足げにうなずいた。

左大臣か……。もはや、大王の御位に即いた気になっている。芥子の煙を吸ったせいばかりでもあるまい。

女の唇と舌がもたらす快樂に身を委ねつつ、大海人皇子は思った。

吾が左大臣ならば、葛城皇子には、どんな官位を与えようというのだろう。右大臣か？ かの葛城皇子が、吾よりも低い官位で、満足するはずもない。

どこまでも愚かな皇子よ……。

やがて、大海人皇子は女の口に、有馬皇子は女の陰に、精を迸らせた。

「盟は結ばれたな」

息を整えつつ、額の汗をぬぐい、有馬皇子は言った。

盟？ 訝しげな大海人皇子に、有馬皇子は言を重ねた。

「吾は、かように、彼らとも盟を結んだ」

有馬皇子の眼差しの先に、女どもを押し倒し、激しく姦す男どもがあった。やはり……。大海人皇子は思った。肉林の戯れに紛れ、大王位を狙う謀が練られていたのだ。

二人して一人の女を姦し、二つの口に精をもらして盟を誓う。浅はかな謀にふさわしい儀式かもしれないぬ。

有馬皇子は、蔑むような眼差しで、白い背と尻を見せて床にうつぶせ、まぐわいの余韻に浸る女を見下ろして言った。

「大海人皇子は、この女を知るや」

首を振る大海人皇子に、有馬皇子は呟いた。

「小足皇女」

思わず眼を見開いた大海人皇子に、酷薄な笑みを浮かべ、有馬皇子は立ち上がった。

「吾が異母姉」

傍らの衣を引き寄せ、出ようぞ、と有馬皇子は踵を返した。

宮の裏は、小さな庭になっていた。

亭あずまやに入り、夜空に浮かぶ月を見上げ、有馬皇子は言った。

「吾には、荒淫の血が流れているらしい」

自らを嘲るように、うつろな眼差しで有馬皇子は続けた。

父なる豊日大王。その姉なる宝大王たからのおおきみ。一夜とて、独り禪しぜんで過ごすことも出来ぬ祖おやども……。

「異母姉なる小足皇女も同じ……。初めてまぐわった時、皇女が十、吾は八の齡であった」

小足皇女は、生まれついで暗愚あんぐであった。言葉を感じず、ただ肉しむらのみが早く熟し、九歳になる頃に自らを慰める術すべを知った。そして十歳になった時、不意に有馬皇子を押し倒し、姦した。

「まず、吾はおののいた。その後も皇女は吾を姦しつづけた。やがて吾もまぐわいの快樂くわらく（けらく）を知り、皇女を姦した。時には、かの多治比皇子たじひのみこ——讚良さきらが殺した異母弟と二人して姦した。

やがては小足皇女に限らず、豪族の娘どもを、民の乙女どもを姦した。父なる大王は、多淫こそ大王たるもののあるべき姿のたまと宣のたまった。子を多く産ましめ、大王家を安泰たらしめることが、皇子のなすべきこと、と……」

何故にさような忌まわしき過去を吾に明かす……。大海人皇子は、月影を見つめつつ語る有馬皇子から、眼を離せなかつた。有馬皇子は、その眼差しに気づいて笑った。

「大海人皇子は、不思議な人だ」

「不思議な？」

「何もかも、胸の裡を明かしたくなる」

苦笑いする大海人皇子に、有馬皇子は問うた。

「大海人皇子の父は、田村大王たむらのおおきみであったな」

田村大王は、有馬皇子にとつては叔母なる宝大王の夫せにあたる。

「然り」

「母は、息災そくさいか」

母なる稗田阿礼ひえのあれに最後に会ったのは、いつであったか……。大海人皇子は、胸を掴まれたような痛みを覚えつつ、言った。

「母は、伊勢の海部あまべの娘。すでに身罷みまかった」

かつて、そのように教えられたとおりに応える大海人皇子に、有馬皇子は痛ましげな面差しを作った。

「大海人皇子は、伊勢の出であったな」

頷く大海人皇子に、有馬皇子は重ねて問うた。

「初めてまぐわったのは、伊勢の乙女か」

「何故に」

大海人皇子は、破顔した。

「さような事を問う？」

「吾は打ち明けた。初めてまぐわったのは、異母姉なる小足皇女であると」

さらば、汝なれも言え、と言わんばかりに、眼を見開いて覗き込む有馬皇子に、大海人皇子は、仕

方なく頷いた。

「如何であつた」

せきこむように問う有馬皇子に、大海人皇子は問い返した。

「如何……とは？」

「初めてまぐわうた時、如何ようであつた？」

大海人皇子は、かすかに眉を擡めた。

初めて、あだ 厩那、すなわち額田郎女に会つたのは、十二の時。海部の小盾らとかの崖の洞に赴いた。厩那を姦そうとした小盾らを、大海人皇子は止めようとした。それ故に、厩那は皇子になつき、やがて伊勢の宮に共に住まうようになった。

はじめて厩那とまぐわつたのは、その二年の後。厩那が、飛鳥板蓋宮にて、蘇我鞍作を討つた後であつた。

吾は……皇子は、軽く拳を握つた。厩那に、額田郎女に頼つてばかりであつた。しかし、嘲りつつ姦したことは、一度もない。

「初めてその乙女と逢うてより、二年の後であつた」

口を開いた大海人皇子に、有馬皇子は、驚いたように問うた。

「まぐわうまでに、二年も？」

「然り」

「二年の間、その乙女と如何に過ごしたのか？」

「慈しんだ」

「皇子たるものが、何故に、すぐさま、まぐわなかつたのか？」

「有馬皇子よ」

大海人皇子は、腹の底に憤りを押さえ込みつつ、やわらかに微笑みつつ言った。

「たとえ、相手が皇子であつても、姦されることに抗う乙女は、いる」

虚を衝かれたように有馬皇子は口を噤んだ。しばし俯き、やがて貌を上げ、顎を突き出した。

「多治比皇子を殺した讃良のようにか？」

その眼に、妬みに似た憎悪が宿っていた。

大海人皇子は悔いた。今は、有馬皇子の謀に加わることに、寸毫も疑いを持たせてはならぬ時だと言ふのに。

「有馬皇子よ」

大海人皇子は、眼差しを伏せて言った。

「吾は、父なる田村大王にも、母なる伊勢の乙女にも、逢うたことがない」

うなだれつつ、皇子は続けた。

「吾には親もなければ、兄も弟も、姉も妹もない。故に、かの乙女を妹のように慈しんだのみ」

そつと眼を上げると、有馬皇子に、傲岸な笑みが戻っていた。

「それゆえに、養い子たる讃良を救いたいのだな」

弱みを見せたことが、有馬皇子の自負心をくすぐつたらしい。

「夜が明ければ、讃良に会わせる」

有馬皇子は立ち上がった。唇の端が、醜くゆがんでいた。

「今宵は、この仮宮にて寝まれよ」

二人の舎人、海部大石と村国男依は、門に近い苦屋に留められたまま、大海人皇子は独り、宮の裡の狭い室に通された。薄く敷かれた褥しとねに身をもぐりこませ、ふと、思った。

有馬皇子が、吾が身を害そうとすれば、たやすくし得る……。

枕辺まくらべに剣を置き、身動きひとつせず、皇子はまっすぐ天井を見つめた。

そのまま夜は更け、そして明けた。

浅い眠りから覚めたとき、皇子は、褥の中で、剣を胸に寄せ、両手で握りしめていたことに気づいた。鞘さやが手の汗で濡れていた。

軽く、戸を叩く音がした。有馬皇子の舎人であった。

「有馬皇子が、共に朝餉あさめしを、と」

「諾」

皇子は褥を出で、衣を調ととのえた。舎人に随したがい、有馬皇子の部屋へと向かった。

昨夜、ともに小足皇女を姦し、大勢の豪族の男女がまぐわいあい、酒と芥子の煙と、人の肉から滴したる匂いに満ちていた部屋は、きれいに浄められ、髪を調えた有馬皇子が、奥に坐して椀の粥を啜すすっていた。その傍らに坐し、同じく箸を動かす人の姿に、大海人皇子は立ちすくんだ。

「つつがなく、過ごしてあったか？」

椀から貌をあげ、微笑んだのは、葛城皇子であった。

すでに齡三十二。耳元から顎にかけて、こわい髭を長く伸ばし、太く生えていた眉はやや薄く、かえって強い孤を描き、鬨かっち達でかつ冷たい眼差しは、以前にもまして強い光を放っていた。

「幾年いくとせぶりの再会ぞ？」

有馬皇子が問うた。

「情の薄い異母弟にて、こちらから報しらせを出さぬかぎり、何も言うては来ぬ」

葛城皇子は笑った。

「五年いつとせ、文の交わりも絶えていた」

「されど」

有馬皇子は笑った。

「この度の謀はかりごとを打ち明けたとき、大海人皇子がまず問うたのは、葛城皇子が加わっているか否か、であった。けっして異母兄を蔑なげろにしていたわけではないであろうよ」

向けられたその眼差しは、これで疑念は晴れたであろう、と言わんばかりであった。葛城皇子は、薄く微笑んで椀かゆの粥かゆに箸を入れ、口に運んでいる。

「大海人皇子に、粥を」

有馬皇子に命ぜられ、舎人は拝礼して去った。

「大海人皇子よ」

葛城皇子は、空になった椀を置き、袖の袂から布を取り出し、髭に垂れる滴しずくを拭いた。

「讚良のことである」

大海人皇子は、そっと有馬皇子をうかがった。有馬皇子は、知らぬげに、椀の粥に箸を差し入

れている。

「吾が手元に預かる」

大海人皇子は驚き、声がうわずった。

「されど、讃良は……」

「確かに、讃良の母を死なしめたのは、吾」

葛城皇子は、面差しを動かさず、大海人皇子を遮った。

「それ故、汝をして、讃良を育ましめた。礼を言う。されど」

讃良もすでに十三。公に、大王家の血を引く皇女として遇さねば、あまりに哀れである。

「讃良は、吾が難波に随れ帰り、しかるべき宮を与え、食封や舍人、女孀を給する」

政事まつりごとの場から去って久しいとはいえ、葛城皇子の財たからは大きい。大海人皇子の手元に置くよりも、豊かな暮らしを送れよう。

「有馬皇子も諾された」

薄く笑い、有馬皇子は大海人皇子を見やって頷いた。

なるほど……。

大海人皇子は、了解した。

葛城皇子は、かつて有馬皇子の父なる豊日大王を擁して、蘇我鞍作を滅ぼした。有馬皇子が、葛城皇子に、より信を置いていたとしても、不思議はない。

すなわち、あくまでも、讃良を人質としておくことで、大海人皇子を、宝大王誅戮の謀に加担せしめ、裏切りを許さないと言う意なのだ。

「讃良独りにてはさびしかるう故、木幡こはたも共に随れて行く」

葛城皇子はそう言い、安堵せよと言わんばかりに微笑んだ。

木幡は、古人皇子の娘。すなわち、大和を建てた飯豊女王の末裔。その木幡を手中にし、やがて政事の場に復帰した後、どのように使うつもりなのか、おそらくそこまで、葛城皇子は策を練っているであろう。

やはり葛城皇子は、謀にかけては有馬皇子の比ではない。

「諾してくれような」

覗き込むようにこちらを見る葛城皇子の眼差しに、大海人皇子は抗えなかった。

「有馬皇子と」

大海人皇子は、震える面差しを隠すように拝礼した。

「葛城皇子の意に随う」

二人の皇子が、貌を見合い、満足げに頷く気配を背に感じ、大海人皇子は、こみあげる憤りを押さえつけた。

そのとき、屋の戸が外から叩かれた。

「来たか」

有馬皇子は朗らかに言った。

「入れ」

戸が開いた。

矛ほこを構えた兵どもに囲まれ、讃良がうな垂れて立っていた。



讚良……。

大海人皇子は腰を浮かせた。

眼の下が黒ずみ、瞳は虚ろに暗く、唇が青い。身に危害を加えられた様子はなく、頬もこけてはいなかったが、額に傷の痕があった。

「讚良よ」

有馬皇子が叫んだ。

「汝が養い親、大海人皇子であるぞ」

讚良が貌をあげた。瞳が揺れ動き、眼が大きく見開かれた。

腕を挿んでいた兵を跳ね飛ばし、讚良は大海人皇子に抱きついた。激しく両腕を首に回し、唇でなにか呟きつつ、胸に貌を埋め、しきりに頭を振った。

「嬉しかろう」

有馬皇子の、心無げな言葉に、大海人皇子は、讚良の背をかい撫でつつ、ひそかに眉を顰めた。

「養い親だけではない、汝が父なる葛城皇子も、ここにおわずぞ」

讚良がびくりと肩を震わせ、不意に貌をあげた。

「これよりは、汝を難波に連れ帰り、実の父として慈しむ」

有馬皇子の言葉に、讚良は大海人皇子を見つめ、それから、こわごわと首を動かした。

葛城皇子は、静かに立ち上がった。讚良は、大海人皇子に抱きついたまま、葛城皇子を見た。

葛城皇子は微笑み、口を開いた。

「皇女よ」

讚良の四肢が細かく震えるのが、大海人皇子の胸に伝わってきた。

「美まし乙女に、よくぞ育った」

恐ろしい咆哮が、大海人皇子の耳元で炸裂した。首にしがみついていた二つの腕が離れ、しな

やかな軀が跳躍した。

「讚良！」

戸近くにあった兵どもの背後で悲鳴があがった。

木幡だった。

「よせ！」

同時に、葛城皇子が呻いた。讚良は、葛城皇子にしがみつки、その股間に、何度も膝を打ち込んでいた。

葛城皇子は仰向けに倒れた。讚良はその胸にまたがり、拳を固め、葛城皇子の貌を撃った。

矛を構えて足を踏み出した兵どもの間をすり抜け、木幡が讚良に抱きついた。

「讚良！ 鎮まれ！」

悲痛な叫びに、讚良は拳を宙に振り上げたまま振り返り、木幡を見た。木幡の頬をつたう涙を眼にし、喘ぎつつ、貌を歪めた。

讚良の眼差しが、大海人皇子に向けられた。何かを訴えるような、苦しげな眼差しであった。

眼を背けてはならぬ……。

大海人皇子はそう念じつつ、しかし、うなだれるしかなかった。

讚良は、総身から力が抜けたように、肩を落とした。ゆつくりと立ち上がった。木幡も立ち上がり、すがりつく讚良を抱きしめた。

葛城皇子は、うつぶせに転がり、動かなかった。

有馬皇子は、蒼ざめた貌で、右手を床に突き、のけぞって震えていた。

大海人皇子は、身を硬くして、座したままであった。

吾を、助けて……。

かつて、巫那あだが叫んだ言葉が、大海人皇子の脳裡に蘇り、耳について離れなかった。

あの時と同じ眼だ……。救いを求め、虚しいと知るや、絶望と悲しみに光を失っていったあの眼。

明るい日の輝きが、二上の緑に萌もえる山肌を照らしていた。大海人皇子と二人の舍人を乗せた三騎の馬が畦道を鳴らして通り過ぎる度に、田の水に浸かって働いていた民どもが手を止め、拝礼する。

有馬皇子の宮を出てからも、皇子の心は晴れなかった。

打ちひしがれた讚良は、木幡に抱えられ、兵どもの矛に守られ、よろばいながら、部屋を出ていった。

二人の乙女が去るやいなや、有馬皇子は舍人を呼び寄せ、葛城皇子を別の部屋へと運ばせ、医人と呼ぶように命じた。そして大海人皇子に貌を向けた。

実の父のふぐりをも蹴り砕こうとした乙女、よくぞこれまで育まれたものよ。

さも闇達げに笑う有馬皇子に、大海人皇子は応えず、俯いていた。

大海人皇子は……。有馬皇子は、笑みを消して呟いた。女は姦すものではなく、慈しむものと心得ている。それ故に、讚良も皇子を慕うのであろうか。

浅はかな皇子が……。

さかしらな有馬皇子の呟きを思い出し、大海人皇子は首を振って打ち消した。

河辺宮に還った大海人皇子を、葛城皇子が訪なってきたのは、その二日後の夜であった。

「鏡郎女の責めに比べれば」

あの時は、三日は寝込んだ。讚良に蹴られた日は、さすがに臥所ふしどを離れられなかったが、あの箸墓はしほかでの苦しみを思えば、堪えられなくもない……。

「まだ痛むが」

葛城皇子は、苦々しく笑いながら、股間をさすった。

大海人皇子の寝屋に、舍人を遠ざけて二人、向かい合った葛城皇子は、運ばれた酒を口に含みながら言った。

「で、讚良は」

「難波へ向かった」

抗うことも、荒ぶることもなく、懲しつらうと吾が命に随った、と葛城皇子は付け加えた。

「案ずるな。讚良はいずれ、汝が元へ還す」

貌をあげた大海人皇子に、葛城皇子は言った。

「汝が妃として」

「妃？」

訝しげに見つめる大海人皇子を、葛城皇子は面差しを引き締めて見返した。

「然り。吾が娘にして、汝が妃として」

ふと眼を逸らし、葛城皇子は問うた。

「宝大王が、いずれ崩御した後、汝は誰が大王の御位に即くと思うぞ？」

「大和の諸豪族が望む者が大王となる。有馬皇子はそう言った」

大海人皇子の応えに、葛城皇子は大笑した。

「汝は、有馬皇子が治める御世を望むか？」

応えを聞くまでもなく、葛城皇子は続けた。

「望むまい。されば、宝大王が崩御し後の世は……」

実の母の生死を、こともなげに口にする葛城皇子を、大海人皇子は瞬きもせずに見つめた。

「吾と汝で治めねばならぬ」

やはり……。葛城皇子は、有馬皇子にたやすく大王の御位を渡す気などない。となれば、宝大王の息のあるうちか、崩御した後か、有馬皇子と葛城皇子との間に争いが起こる。その折は味方せよ、と言いたいのだ。

額田郎女は、大海人皇子を大王位に即けるために、宝大王は殺さない、という。もし、葛城皇子が、大王崩御を機に、有馬皇子とその一派の排斥を謀っているとしたら、あるいは、その先手を打って、葛城皇子をも共に排することも、できぬわけでもあるまい。

「葛城皇子よ」

大海人皇子は微笑み、問うた。

「吾は、何をなせばよい？」

「何もするな」

低く、静かに、しかし、心に深く釘を打ち込むように、葛城皇子は言った。唇は薄く笑っていたが、眼はまっすぐに大海人皇子を射抜いている。

「汝はただ、見ておれ」

一瞬、大海人皇子の背筋が慄えた。

まさか、気づいているのでは、あるまいな……。

大海人皇子の懸念をあざ笑うように、葛城皇子は相好を崩した。

「汝は、策や謀を弄んではならぬ。吾が意に、添うていればよい」